

令和4年度 第1回記念館講座「龍子記念館／開館から60年の歩み」

大田区立龍子記念館 学芸員 木村 拓也

1. 龍子記念館に私がきてからの10年間

■開館50年企画展の開催

2013年9月の開館50年企画展「龍子がめざしたもの」の開催に際し私が担当を務める。山種美術館、和歌山市立博物館から作品を借用するも数点の作品借用のため「企画展」だった。龍子生誕130年特別展（2015年）、龍子没後50年特別展（2017年）、青龍社創立90年特別展（2019年）の開催を続け、美術館として実績を残す。



現在では隔年での「特別展」開催が定着し、国立や有名美術館から作品を借用できるように。

■展示企画の多様化と地域連携や現代アートとのコラボレーション

特別展と並行して、年3本の通常展を開催（担当してから25回の開催）多角的なテーマを各回設定し、展示企画の多様化を目指した。さらには、小中学生に向けては、対話型鑑賞の機会の充実化、地域住民に向けては、講演会による魅力の発信、ボランティア育成講座による地域連携を呼びかけた。



2021年には東京オリ・パラ開催記念展での北斎の展示や高橋龍太郎コレクションの現代アートの展示などを通じて地域の文化拠点化を進めた。

■広報PRの強化

メディアからの注目の高まりとともに、書籍の出版やSNSによる情報発信を強化した。結果、2021年度は、長期休館のあった前年の3倍近い来館者数で、その可能性が明確になった。

2. 龍子の「会場芸術」と美術館建設構想

■龍子記念館は来年開館60周年

- 1936年（昭和11） 「会場芸術の主張」で近代美術館にこそ自らの作品は展示されるべきと発言戦後になると、十年がかりで自宅前の土地を買い足す
- 1959年（昭和34） 文化勲章を受章。
- 1960年（昭和35） 『三十五年度春の青龍展出品目録』内において記念館設立にふれる
- 1962年（昭和37） 6月6日の誕生日に記念館が竣工し、喜寿記念祝賀会が記念館で開催される
- 1963年（昭和38） 6月6日の誕生日に龍子記念館が開館する。社団法人化して管理運営
- 1966年（昭和41） 4月10日、龍子が逝去。その後も社団法人が管理運営を行う
- 1991年（平成3） 前年に大田区が寄贈を受け改修、11月に大田区立龍子記念館として開館

■「会場芸術」とはどのような芸術思想だったのか

「会場芸術は、後の用途の無い芸術といふ嘲辞も受けているが、後のことは、近代美術館が出来さえすれば問題は無い」（川端龍子「会場芸術の主張」『東陽』1936年6月）



20代後半にボストンで得た感銘（ボストン美術館での日本の古美術との出会い、ボストン公共図書館におけるピュヴィス・ド・シャヴァンヌの壁画の存在感）

再興日本美術院の時代に、受けた「会場藝術」という批判の言葉を用いる。

「吾人の主張する大衆と藝術の接触に、展覧会の施設を礼讃するもの。」（「会場藝術の主張」『青龍社第三回展覧会出品目録』（1931年））



戦後には、「展覧会で行動する限りでは、大衆を対象とするのであるから、文化的福祉の享受に」と社会全体に働きかけた「青龍社の二十年」『青龍社創立二十周年記念展出品目録』（1948年）

■『龍子記念館館憲記』に見る龍子の記念館設立の理念

『昭和三十五年度春の青龍展 出品目録』（1960年）において記念館建設構想を初めて語る。

しかし、これよりも前に龍子は自宅の前の敷地をコツコツと買い足していった。

さらには、古稀を記念して社団法人青龍社を設立した（1955年）。

その目的に「会館建設事業」を起こすと記載がある。

■記念館の竣工（1962年6月6日）と開館（1963年6月6日）

総工費は、当時の金額で5,000万円→2階建ての2フロアの展示室の予定だったが断念

記念館の設計だけでなく、駐車場の整備や展示ケースの考案、作品解説も自らで作り始めた。

→「記念館というようなものは、自分で建てるべきものではないかもしれない。しかし、私の分身として残した作品のため、あえて『家』をつくった。」（『サンケイ』1963年6月5日）

そして、生涯の友である洋画家・鶴田五郎を理事長に、初代・館長は三女の紀美子が就任。

所蔵作品は、「自分の年次制作は、大作主義をとって来たところである。」「だから大小合せて150点ほどの手持ち品がある。（略）卑俗な言い方をすれば、売れないから残っているのである。」

（『龍子記念館 館記1』1963年）→逆に、だからこそ巨大な龍子芸術の醍醐味が味わえる。

3. 龍子記念館竣工と喜寿祝賀会

■竣工の日に龍子の喜寿を記念した祝賀会が開催される。

午前は弟子たちに囲まれ、昼は検知関係者、午後は美術関係者を招いての祝賀会。

会場には、百貨店の社長や評論家の他、横山大観夫人の姿もあった。

大観夫人の「大観がここに出席していたら、どんなにか喜んでくれたことでしょう」という言葉に龍子は感極まり涙した。

■龍子記念館開館の日

第一日目は、朝にテープカットの予定があったが、龍子が定刻前にカットしてしまうハプニング。

二日目に町会関係者、ご近所の方々を招待し、三日目より一般公開となった。

「何分にも城南地区の片隅であり、交通目標がパッとしません為に、随分と御不便を掛けております。」（『第三十五回青龍展出品目録』1963年）→この定刻前のテープカットから来年で60年。

○まとめとして

記念館は、龍子芸術の集大成であり、龍子の思いとともに日本近代美術史の大きな足跡が残されている。龍子の芸術を未来に伝えていくため、これからも新たな価値を創出していかねばならない。

今後の龍子記念館の予定

令和5年2月11日（土）～3月12日（日） 開館60周年特別展「横山大観と川端龍子」を開催

大観の若き日の代表作《無我》（1897年、水野美術館蔵（後期のみ展示））や晩年に富士と龍を描いた《或る日の太平洋》（1952年、東京国立近代美術館蔵）等を展示します。

関連イベントとして、3月4日（土）13:30～15:00に特別展講演会を大田文化の森で開催（募集開始は12月下旬より大田文化の森運営協議会 Web サイトにて）。